

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	代理往診体制の現状
演者名	木内大介、村上典由、北山撰、遠矢純一郎
所属	医療法人社団プラタナス 桜新町アーバンクリニック

目的

在宅クリニックが成長していくためには、緊急往診対応の負担軽減ができる仕組みが必要である。しかし、9割以上の主治医は、患者を自ら対応しているのが現状である。当クリニックでは、2011年から夜間と休日の当直医による代理往診体制が整備されている。主治医が患者や家族からの緊急コールに対応し、当直医に代理往診を依頼している。

実践内容

当直医の記録から、代理往診体制の現状分析を行なった。それをもとに、主治医と看護師からヒアリングを行い、代理往診体制を行なうための必要な要件を整理し、質の向上を図った。

実践効果

2013年12月から2014年6月までの6ヶ月間に、計27名の当直医が関わった。当直医への依頼は271件で、往診は234件(86%)であった。往診は、休日の日中(9時-18時)に集中しており、この曜日と時間帯だけで全体の50%を占めた。往診依頼の理由としては、発熱が最も多く、その次が看取りであった。往診先の処置では、手技項目よりも患者や家族とのコミュニケーションを必要とする項目(経過観察、薬剤処方・指示、看取りなど)が上位を占めていた。また主治医と看護師からのヒアリングから、診療録の質が当直医によりばらつきがあることがわかった。

これらを踏まえ、診療録は SOAP 形式を徹底し、患者や家族の様子も記録することで、提供する情報の質の向上を図った。主治医の当直医に対するフィードバックを分析したところ、改善前は、ポジティブなコメントが 86%であったのが、改善後には 100%となった。

考察

当クリニックの当直医における往診は、休日の日中に集中しており、この時間帯に主治医が往診に行く必要性を減らしていることがわかった。診療録のひな形の改善により、当直医の診療録の質の向上が見られ、通常の診療時に主治医への大きな助けになっている。